

第2部

青少年長崎平和使節派遣



「平和の泉」の前で

●派遣生（敬称略）

酒井 日向（中学生）

中島 心暖（中学生）

砂川 柊太（中学生）

稲葉 さくら（中学生）

小山 竜輝（中学生）

●引率者

総務部総務課 豊田 敦子

樺島 亮

1. 行動日程表

第15回青少年長崎平和使節派遣 平成29年8月8日～10日(2泊3日)

8月8日(火)

時間	行動内容	場所
6:30	集合	JR大井町駅中央口
8:15	羽田空港発	羽田空港
10:10	長崎空港着・リムジンバスでホテルへ	長崎空港
11:20	ホテル着	エスペリアホテル長崎
12:20～	昼食	平和公園近辺
13:10	★青少年ピースフォーラム受付	平和会館ホール
13:30～15:00	★開会行事(被爆体験講話など)	平和会館ホール
15:10～17:00	★参加型平和学習 (被爆建造物等のフィールドワーク)	長崎医科大学附属医院・山王神社 爆心地公園
17:30～18:30	「平和の灯」事業参加	平和公園入口～平和の泉周辺
19:00～	夕食	長崎市内
20:00	ホテル着	エスペリアホテル長崎
22:00	就寝	

8月9日(水)

時間	行動内容	場所
7:00	起床	
7:30	朝食	ホテル内レストラン
8:30	ホテル出発	エスペリアホテル長崎
9:00	平和公園着	平和公園
9:30～11:48	平和祈念式典参列(長崎市実施)	平和公園・平和祈念像前
12:30～	昼食	平和公園近辺
13:30～15:50	★平和学習	長崎ブリックホール国際会議場
16:15～17:30	自主研修	山里小学校・永井隆記念館ほか
17:30～18:30	原爆資料館見学	原爆資料館他
18:40～	夕食	長崎市内
20:00	ホテル着	エスペリアホテル長崎
22:00	就寝	

8月10日(木)

時間	行動内容	場所
7:00	起床	
7:30	朝食	ホテル内レストラン
9:00	ホテル出発	エスペリアホテル長崎
9:00～14:00	自主研修・市内見学(昼食)	長崎市内
14:15	ホテルに戻る	大波止
14:30	リムジンバスで長崎空港へ	
17:05	長崎空港	長崎空港
18:45	羽田空港着	羽田空港
19:50	解散	JR大井町駅中央口

★は青少年ピースフォーラム事業(長崎市主催)

「青少年ピースフォーラム」とは？

毎年8月9日の平和祈念式典にあわせて、長崎市では、「青少年ピースフォーラム」を平成5年度から開催しています。「青少年ピースフォーラム」は、全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的としています。

このフォーラムには、大学生や高校生などで構成される長崎市の「青少年ピースボランティア」が中心となって、平和学習の進行やフィールドワークの案内などを行っています。

2017年は「品川区青少年長崎平和使節」をはじめ、全国から37団体、404名もの青少年が参加し、ピースボランティアなどと交流を深めました。

日	時	内 容 〈場 所〉	
1日目 8/8 (火)	14:00 ～15:00	開会行事（被爆体験講話など）〈平和会館ホール〉	
	15:10 ～17:00	【コース別の平和学習】長崎の歴史（原爆）について学びます。	
		Aコース 平和学習 〈平和会館ホール〉 こじんまりフィールドワーク （屋外） 〈原爆資料館周辺〉	Bコース 被爆建造物等 フィールドワーク（屋外） 〈原爆資料館周辺〉
18:00 ～19:30	交 流 会（希望者） 〈長崎新聞文化ホール〉		
2日目 8/9 (水)	午前	平和祈念式典への参列 〈平和公園内平和祈念像前広場ほか〉 または 長崎市内学校での平和集会への参加	
	13:30 ～15:50	【コース別の平和学習】平和について考えます。	
		Aコース 平和学習 〈平和会館ホール〉	Bコース 平和学習 〈長崎ブリックホール国際会議場〉

事前打ち合わせ会

派遣生が平和使節派遣事業の趣旨を理解し、それぞれが目的を持って長崎への派遣に臨めるよう、事前打ち合わせ会を2回実施しました。

打ち合わせ会では、参加者の自己紹介や参加への動機、非核平和都市品川宣言事業および青少年長崎平和使節派遣の目的についての説明、自主研修の検討等を行いました。

また、平和への願いを込めて長崎へ持って行く千羽鶴を全員で作成しました。

〈第1回〉6月21日（水）午後6時～

- ・自己紹介
- ・参加動機の発表
- ・「非核平和都市品川宣言」事業の説明
- ・「青少年長崎平和使節派遣」の目的を説明



〈第2回〉7月20日（木）午後6時～

- ・「平和の折り鶴」受領
- ・スケジュールの最終確認
- ・自主研修の検討
- ・ピースフォーラム事業について説明
- ・自主研修計画表の提出
- ・派遣報告書類の説明

事後報告会

8月31日（木）午後6時00分～

今回の平和使節派遣を通じて印象に残ったこと、学んだことなどを話し合いました。

また、来年度の事業運営に生かすため、感想・意見を発表してもらいました。

- ・派遣の感想、反省発表
- ・成果報告書について
- ・青少年ピースフォーラム修了証書および派遣修了証書授与



2. 長崎での主な活動

(1) 青少年ピースフォーラム開会行事（被爆体験講話）

<日 時> 8月8日（火）13：30～15：00
<場 所> 平和会館
<内 容> 開会式は青少年ピースボランティアが司会をつとめました。被爆体験講話では、14歳で被爆し、母と中学1年生、小学5年生の弟2人、それに5歳の妹を失った深掘讓治さんのお話を聴講しました。



被爆体験講話
深掘讓治さん



司会をつとめた
青少年ピースボランティア

<酒井 日向>

私は長崎の平和使節派遣に行く前、被爆された方の話書かれている本を何度か読んでいましたが、被爆者の方に来ていただいて実際に話を聞くと、被爆者の話し方やその場でしか味わえない緊張感などを感じられました。この体験を生かし、私の小さな世界で広めていきたいと思います。

<稲葉 さくら>

深掘さんが被爆したときに起きたことを、私たちの世代に一生懸命に伝えようとしていたのを見てとても心を打たれました。これから先も、国民一人一人が日本の平和、世界の平和について深く考えることが必要だと思いました。

(2) 被爆建造物等のフィールドワーク

<日 時> 8月8日(火) 15:10～17:00

<場 所> 原爆資料館周辺(山王神社コース)

<内 容> 山王神社や長崎医科大学を青少年ピースボランティアと一緒に見学し、被爆の実相を学習しました。



長崎医科大学



山王神社(二の鳥居)



山王神社(被爆クスノキ)



爆心地公園(被爆当時の地層)

<小山 竜輝>

被爆した建造物に実際に触れ解説を聞くなど、五感をフルに活用して原爆について知ることができた。特に長崎医科大学の旧正門では、門のかたむき具合などがよくわかった。

<砂川 柊太>

実際、写真で見ていたよりも、原爆の影響というのが町の所々にありました。そして、その影響を受けた物たちが、思っていたよりも鮮明に痛々しく残っていたことに驚きました。

(3) 平和祈念式典

<日 時> 8月9日(水) 9:30～11:48

<場 所> 平和公園内平和祈念像前広場

<内 容> 被爆72周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列し、原爆が投下された11時2分には、一斉に黙とうを捧げました。



千羽鶴を捧げる派遣生たち



式典に参列する派遣生たち



11時2分黙とうを捧げる

<小山 竜輝>

黙とうのときには、72年前、この地でおこったことを想像しながら行った。その後の平和宣言、放鳩では、私たちの世代が平和に向けて一歩を踏み出さなければいけないと決心した。

<中島 心暖>

平和祈念式典に参加するということとても貴重な体験をさせてくださり有難うございました。TVではわからない雰囲気というものを感ずることができました。被爆した方が被爆体験を語り終えたときの拍手の大きさに驚きました。大切な式典をこの先も続けていかななくてはならないと思いました。

(4) 平和学習（意見交換）

<日 時> 8月9日（水）13：30～15：50

<場 所> 長崎ブリックホール国際会議場

<内 容> 青少年ピースボランティアを進行役に、グループに分かれて意見交換を行いました。



モザイクアートを作る



ピースボランティアを交えての意見交換



グループごとの意見交換

<酒井 日向>

シリアの子どもの写真が教えてくれた状況は色々ありましたが、それ以上にわかるのは2人ともとても幸せそうに笑っていたことです。その後に聞かされた話の後、私はとてもがっかりしました。なぜなら、その場面でしか安心して楽しめないなんてかなしいからです。なのでこれからは日本だけではなく世界にも目を向けていこうと思います。

<稲葉 さくら>

他の県の人と話し合いをするのは不安でした。でも、意見交換をしているうちに、自分の考えと相手の考えの違いを見つけたりすることが出来るんだなと気付きました。たくさんの人と戦争について学んだりふれあうことができ、とてもよい経験だったと思います。

(5) 長崎原爆資料館見学

<日 時> 8月9日(水) 17:30～18:30

<場 所> 長崎原爆資料館

<内 容> 被爆資料や被爆の惨状を示す写真などの展示物を見学し、「当時の被害状況」や「核実験の放射能」などを学ぶことで、派遣生一人ひとりが戦争の悲惨さを感じ取り、平和に対する意識を改めて強く持ちました。



館内の資料等を見学する派遣生たち

<砂川 柊太>

他の原爆の資料を見ていたからこそ、色々な資料が全て興味深いものでした。そして、他の資料館よりもとても内容が濃く、時間が足りなくなりそうでした。とても勉強になりました。

<中島 心暖>

日本に原爆が投下される以前にも、原爆を作っている時、実験台として使用された島や、開発中に事故で爆発したりなど、日本以外でも被爆した国があることを知りました。原爆資料館に多くの外国人が来ていて、核兵器廃絶を世界に訴えることは大切なことだと思いました。

(6) 自主研修・市内見学

<日 時> 8月 9日 (水) 16:15～17:30

8月 10日 (木) 9:00～14:00

<場 所> 長崎市内各所

<内 容> あらかじめ計画を立て、ピースフォーラムでは行けなかった被爆関連施設や市内の名所などを巡りました。



平和祈念公園



長崎新地中華街



グラバー園



出島



眼鏡橋

<酒井 日向> 私が一番印象に残った被爆建造物は山王神社にあった大きなクスノキです。このクスノキは何回か治療をして生きかえた木で、2回目の治療の時に大きな石がクスノキから取り出されたというのが印象に残っています。(8日)

(原爆資料館見学) 私がまず印象に残ったのが最初の入口で、年号がかいてあり、時をさかのぼる感じでとても印象に残っています。そして絵や写真はもちろん、アニメを映像にしているとてもわかりやすかったです。(10日)

<中島 心暖> 爆心地から1000M離れていても爆風がとても強かったという話を聞き、長崎に落とされた爆弾の威力は私の想像をはるかにこえていたことを実感しました。時を重ねるごとに戦争への意識が薄れています。しかし核の力は72年前よりも強くなっています。この2つの事実を踏まえ次の世代に伝えていくことが大切だと思いました。(8日)

多くの人と意見を交わし、考えている方向は同じでも、表現の仕方が1人1人違い、色々な人と意見を交わす大切さを知ることができました。話の話題となっていた難民の男の子の隣の家に爆弾が2回落ちたと聞き、平和の尊さを感じました。(9日)

<砂川 柊太> 深堀さんの話を聞いて、改めて原爆の悲惨さを実感しました。そして、深堀さんの実体験を聞いた僕たちが語りつぐのはとても難しいことだと思いますが、そのことをできるように努力していきたいと思いました。(8日)

初めての祈念式典の参列はとても緊張しましたが、式が進行していくにつれて、だんだんとこの式典の重大さを実感しました。そして「NO MORE 核」「NO MORE 被爆者」を忘れずに心に刻み後世に伝えていけるようにしたいと思いました。(9日)

<稲葉 さくら> 当時を再現したような被爆建造物を見ることができました。テレビや写真ではなく、実際自分の目で見るとは私が思っていた以上に迫力がありました。より原爆の恐怖を感じました。(8日)

初めて式典に参加することができました。この式典には多くの人っていて、中には外国の方もいて驚きました。黙とうをしたときは、今からちょうど72年前に一瞬にして人々がなくなっただとを考えていました。この時感じたことはいつまでも忘れないようにしたいです。(9日)

<小山 竜輝> 原爆については、本などで知っていたが、一人ひとりの感じたこと、行動は本だけでは伝わらない。実際に体験した人のお話をきいて、感じたこと、見たものをありのままに感じる事ができた。(8日)

原爆について、それまで学んできたことを復習して、核のいま、そして核の未来について考えながら見学した。加えて世界の核兵器の事情なども解説されていて、原爆、そして核兵器についてわかった。(9日)

3. 成果報告書

平和への思いを新たに世界へ

酒井 日向

2017年8月9日、平和祈念像に雨が降り注ぎ、その表情はまるであの日投下された原爆による長崎の惨状を見て涙を流しているかのように見えました。そしてもうこのような悲劇がもう二度と起きないように祈り、訴えかけているようでした。この光景は私の胸に生涯刻まれることでしょう。そして今回の研修で体験したことや調べて学んだことをここに記しておきたいと思います。

私が今回の研修で一番印象に残ったのは原爆資料館見学です。何故ならそこには広島資料館よりも“亡くなった方”の写真が多かったことです。そこからは人の最期の姿とともに、その人たちの思いや祈りがあふれ出てくるようでした。頭では知識として原爆の被害や悲惨さは理解している気になっていましたが、実際にそこには一人一人の被害者が生きてそして尊厳を失い死んでいったということが、写真で顔や姿を見て再確認することが出来、とても心に深く響きました。

また、被爆体験講話でも原爆が実際に起こった「現実」であることを感じる事ができました。そして、今回被爆者本人から生の声で聴けたことはとても貴重な経験だったと思います。どれだけ理解しようとしても本人にしか分かりえないことが世の中にはあるからです。語り部さんたちが高齢化し、直接伝える人が減っていることが危惧されていますが、これは今後「現実」感の喪失につながっていくように思われてなりません。人は忘れ

ゆく生き物です。時には忘れていくことも必要だと思います。「恨み」や「憎しみ」、そして「怒り」といった負の感情は時と共に忘れていく必要があるのかもしれませんが。でも決して忘れてならないのは「現実」に起きた悲劇とその悲しみ、そしてもう二度と繰り返してはいけないという思いです。

長崎の街並みを歩いていて気付いたのですが、広島に比べると被曝した建物などが少なくとても原爆が投下されたように見えないうらいきれいに見えました。それは調べてみたところ、街を再整備する際に原爆に関する建造物等をすべて取り除いてしまったことによるものだそうです。これには色々な意見があり、保存しておいた方が良かったのかどうかどちらが正しいのかはわかりません。でも、ただ一つ言えるのは当時の長崎市民が負の感情を捨てて、未来への一步を選択したのではないでしょう。

長崎はキリシタンの弾圧等悲しい歴史のある街ですが、更なる悲劇を生んだ原爆投下を体験した受難の街です。それもキリスト教国であるアメリカからです。日本で比較的キリスト教徒が多い長崎で、しかも浦上天主堂上空を目標にしたことはひどく皮肉なことだと思いました。私が調べた限りでは、アメリカでの原爆教育は原爆投下に肯定的であり、そのことに驚きを隠せませんでした。長崎に落とされた主な理由は大きく3つあると言われています。

1. アメリカの被害を少なくし、戦争を早く終結させるため
2. 異なる二種類の原爆を落とすことによる人体実験
3. 冷戦に備えてソ連・中国に対する優位性を示すため

アメリカ人は特に1の理由で原爆投下を必要であったと肯定するようです。中でも良心的（と思われる）な人であっても2回目の原爆投下を広島のみならず3日後にやる必要はなかったという程度の意見で基本的には肯定しています。これは人間を数字でしか見ていないとても恐ろしい意見だと思います。更に当事者国である日本とアメリカ以外では更なる無理解と無関心が溢れています。これは「現実」感が無いからではないでしょうか。被爆国の日本人である私達でもこの「現実」感に関しては曖昧な人が多いのではないのでしょうか。

私達は口を開けば誰もが「日本が世界唯一の被爆国としての悲劇を伝えていかなければならない」と被害国側の一面的な見方でしか主張していませんでした。それが現在このような状態を招いてしまったのではないのでしょうか。本当に加害国や第三者の国のことや立場を理解した上で世界に声を届けてきたのでしょうか。人と人が信頼関係を気づくにはお互いに理解しあうことがとても大事だと思います。原爆の被害国である側面ばかり強制的に主張して、日本の戦争での加害国としての責任も正しく評価しないのであれば、それは世界に声を届け、理解を得ることはできないのではないのでしょうか。客観的に誰もが認める唯一の真実は「戦争や核兵器が絶対悪」であることであり、これを伝えていくためには相手のことをより深く知っていく必要があると感じました。そして私の力は小さいかもしれませんが、この先、私の言葉が世界に届くように私の世界を広めていき、その世界で核や戦争の恐ろしさを伝えていきます。

長崎派遣レポート

中島 心暖

私の母は長崎生まれです。毎年の原爆投下の日には家族で黙祷をし、平和の大切さについて話しています。私の夢は小学校の先生になることですが、戦争や被爆の体験を聴くだけでなく、実際に見るという行為を元に被爆された方が減っていく中、未来に私自身が伝えていくことが大切なことだと思い、参加させて頂きました。

被爆体験講話では、原爆の爆発は太陽に匹敵する熱や大気を真空にするほどのとてつもないエネルギーであり、一瞬に広範囲を破壊としたという話を聞き、長崎に落とされた原爆の威力は私の想像をはるかに超えていたことを実感しました。時を重ねる毎に戦争に対する意識が薄れています。しかし、核の力は72年前よりも強くなっています。この2つの事実を踏まえながら、次の世代に戦争の悲惨さや核の恐ろしさを伝えていくことが大切だと思いました。

平和学習では被爆した樹齢500年の楠が核の力に負けなかったと聞き、驚きました。

土に放射線が残留し植物が育たないといわれていた状況の中で、楠が芽を出したと聞き、当時の被爆した人たちはこの楠にどれほどの希望と喜びをもらったのだろうということを考え、自然の力強さも同時に感じました。

「平和の灯」事業では、ニュースでキャンドルに火が灯った映像をみて、原爆でなくなった方を慰霊し、また平和への思いを伝える大切な行事だと思いました。

平和祈念式典では、式典に参加する貴重な体験をさせて下さりありがとうございました。

TVでは分からなかった厳粛な雰囲気を感じました。被爆の方が被爆体験を語り終えた時の拍手の大きさに驚き、長崎の代表として思いを伝えていらっしゃるからだと感じました。大切な式典をこの先も続けていかなければならないと感じました。

平和学習では同世代の人達と平和について意見を交わし、考えている方向は同じでも表現の仕方が一人ひとり異なりました。平和については、人種や民族を超え、色々な人と意見を交わすことの必要性を感じました。この学習の中で、話題となったブランコに乗った笑顔の難民の子達の家の上に爆弾が2度も落ちたという境遇を聞き、平和の尊さを改めて感じました。

自主研修では、長崎市の永井隆記念館を訪れ、永井先生のために建てた家や当時の記録、永井さん自身の言葉を見ることが出来ました。山里小学校の資料室や今ではあまり残っていない防空壕を見て、戦時中の子供の様子や気持ちを知ることができました。

原爆資料館の見学では日本に原爆が投下される以前にも原爆の製造時、実験台として使用された島や開発中に事故で爆発した事実など、日本以外でも被爆した国があることを知りました。また、原爆資料館に多くの外国人が来ていて、核廃絶を世界に訴えることは大切なことだと思いました。

市内見学では、出島を見学しました。私が想像していたよりも出島は小さく、この中で江戸時代に多くの外国人との取引をこの場所で行っていたことは驚きであり、鎖国の中、よく考えられた政策だと思いました。

今回、青少年長崎平和使節派遣に参加する貴重な体験をさせて下さり、有難うございました。被爆建造物を間近で見学し、被爆され

た方の話を聞き、2度と戦争を起こさないように次の世代に伝える必要があるという気持ちを強く感じる事ができました。語り継ぐだけでなく、被爆建造物などの現物を残すことも原爆や戦争を知らない人たちにとってとても重要なことだと思いました。

将来、私の母が私に伝えてくれたように、今回の派遣で学んだことを人種や民族の壁を超え、平和の実現のため、子供達に伝えていきたいと思います。

ナガサキが伝えてくれたこと

砂川 柗太

僕が今回長崎派遣に参加した理由は、広島での原子爆弾が投下された惨状を自分自身の目で以前に見ていたため、長崎での惨状について調べてみたいと思ったからです。

そして、今回決めたテーマは、「ナガサキでの悲惨さを感じると共に、現代社会へ通じる教訓を学ぶ」です。

僕は原爆のことについて、長崎派遣に行くまでは、1945年8月6、9日に落とされた核兵器としか思っていませんでした。しかし、今回調べたことによって、改めて大切に感じたことは五つあります。

一つ目は、核兵器の恐ろしさです。ナガサキへ投下された核兵器は、7万4千人の命を奪い、7万5千人が怪我をして、苦しみました。一見、7万4千人と聞くと、少ないように聞こえますが、当時の長崎市民の人口は24万人しかいなかったため、およそ30.8%の人々が亡くなっています。もし今の東京に原爆が落ちたら、約300万人の命が失われます。なので、どれだけ恐ろしいものなのかを改めて実感し、どれだけ悲惨だったのかを

感じました。

二つ目は、亡くなった方の殆どが、罪のない市民たちだったということです。元々は原子爆弾の破壊力を調べるために、アメリカ政府が試しに敵対していた日本へ投下したものでした。アメリカ政府は長崎市の重要機関を狙って投下したものでしたが、その日は風が強く、原爆は風に流され、市街地付近で爆発しました。そのため、亡くなった方々の人数は多く、殆どが無実の市民だったのです。この事実を知った時に僕はとても悲しく思うと共に、激しい憤りを覚えました。

三つ目は、戦争で残った痛ましい産物が沢山残っているということです。長崎の出島や眼鏡橋など、美しい景色があるなかで、原爆の悲惨な状況が残っていることを目の前で見たことで、やはり忘れかけていた原爆の悲惨さをちゃんと心に留めておくことが大切であると感じました。

四つ目は、原爆は投下されてからずっと人々を苦しめていたということです。原爆は投下された直後はもちろん人々は苦しみますが、放射能などによって、病にかかり苦しみながら亡くなった方も多数いたということです。僕が実際聞いた被爆者の方の話によると、早期に亡くなった方々は腕に斑点のようなものができ、ご飯を食べなくなり、トイレにたくさん行くようになり、苦しみながら亡くなったそうです。そして、病院に行っても資源が不足しており、重症でも絆創膏のみなど、ずさんな状況を聞き、本当に核兵器の怖さや、想像以上にえぐい核の現実を知り、より許せなくなりました。

五つ目は、今の現代社会はとても危ない状況にあるということです。最近では北朝鮮がICBM(大陸間弾道ミサイル)を頻繁に

発射して、大国を挑発しています。しかも、ICBMの威力は広島や長崎に落とされたものと比較すると、最低限、同等の威力を持っているとされています。つまり、核兵器を使って戦争が起きた瞬間に、地球が滅ぶ可能性もあるということです。この問題については、慎重に対応する必要があります。しかし、対話や資源を枯渇させても現代の力では無意味なのではないかと感じます。そして、あまり時間がないので、急ぐ必要があると思いました。

今回の長崎派遣で、僕は被爆者の方から貴重なお話を聞くことができ、本当に良かったと思っています。しかし、いずれは体験談を話せる方がいなくなってしまう、より戦争というものが薄れていってしまいます。ですから、今後は自分達が語り継いでいくことによって、戦争の「遺産」を残していき、二度と戦争や核兵器の使用を廃絶させることを、絶対に誓うと同時に、一人一人が戦争を理解し、ヒロシマとナガサキを忘れずに平和を追求していくことが大切だと思います。

最後になりますが、僕へ大切な機会を下さり、感謝しています。THANK YOU.



忘れないために

稲葉 さくら

あの日から72年。史上2回目の原子爆弾が落とされた地である長崎に、初めて私は訪れました。最初は、本当に原爆が落とされたのかというくらいにきれいな町並みで、道路には路面電車という長崎独特の歴史感が見られました。しかし、やはり原爆の爪痕は残っていました。爆風で飛ばされ、一本柱になってしまった鳥居、同じく爆風で飛ばされたマ

リア像の頭、防空壕が現存している山里小学校など、多くの被爆物が当時のまま保存してありました。

今回、「戦時中を想像しながら、まだ知らなかったことを知る」というのが私の目標でした。実際は、思っていた以上に悲惨な状況を想像したり、たくさんを知ることが出来ました。

そんな貴重な三日間の中で、私が一番印象に残っているもの。それは、平和祈念式典参列という滅多にない経験ができたことです。式典では多くの歌が歌われていました。それも、被爆者による合唱です。私は、きれいな歌声とともに、歌詞に感動しました。「もう二度作らないで わたしたち被爆者を」という言葉が何度も繰り返されていました。被爆者の方々から、「自分たちが伝えていかないと」という思いがとても伝わってきました。しかしその半面、もう思い出したくないから、本当は歌いたくないのではと私は考えました。だからこそ、まだまだ若い世代の私たちが戦争の悲惨さを伝えていくべきだと思います。

あの日からちょうど72年後の午前11時2分に、私は追悼の意をささげていました。もし、私が戦時中にいたらどうなっていたら、被爆者の方々はこの瞬間にどんなことを考えているのだろうかなど、1分間、たくさんを考えていました。

他にも、印象に残ったことはたくさんあります。1日目の被爆体験者講話では、深堀譲治さんという、被爆当時14歳の方からお話をしていただきました。原爆が投下された時、母と二人の弟、そして妹が亡くなったそうです。深堀さんが工場で働いているときに原爆は落下し、ピンク色の光が全体に広がり、爆

風が一気にきて、自分の頭の上に落ちたように感じたと言います。話の最後に深堀さんは、「何もない平凡な毎日が一番幸せに感じる。」とっていました。やはり、被爆した方にしか分からない思いや辛さがあるんだなと改めて実感することが出来ました。

原爆資料館見学では、言葉だけでは伝わらない、何と云っていいのかわからないほどの悲惨な写真がいくつもありました。また、当時被爆した方の古びた洋服がありました。この資料館で見て感じたことは絶対に忘れてはいけないと思い、しっかりと目に焼き付けていました。

日本の平和、世界の平和につながる第一歩として、さまざまな体験をすることが出来た3日間。本当に良い経験となったものばかりでした。「被爆者がいる時代」の終わりが近づいているのと同時に、戦争を知らない人々が増えている現在、戦争の悲惨さを忘れてしまう前に、私たちが伝えていかなければならないと思いました。

最後に、貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

未来に向けて、一歩ずつ

小山 竜輝

人類史上2度目の原子爆弾が長崎市に投下されたあの日から今年で72年。それから今までに亡くなった人の数、約7万4000人。あの日から平成29年8月9日までに原爆死没者名簿に登載された人の数、17万5743人。投下されたあの一瞬と今までのうちに、これだけの罪のない人が亡くなられたという事実を目の当たりにしたときの気持ちは、言葉だけでは表現しきれません。

そもそも今回参加した青少年長崎平和使節派遣に応募した理由は、小学校の図書室で、広島原爆について広島の地理的な要素とともに詳しく書かれた「はだしのゲン」を読み、そこで長崎原爆のことも知り、原爆に対する理解をさらに深めたくなったからです。それに加えて、将来、何らかのかたちで平和に貢献できる仕事に就きたいという気持ちが自分の中にあり、応募しました。

1日目の被爆体験講話で感じたこと、それはあの一瞬に感じたことは一人ひとり違って、様々な思いを抱いていたということでした。家族のこと、友人のこと、今まで生きてきたこと——。人は苦しい思いをしたことは思い出したくないはずですが、しかし、講師の方は見たもの、聞いたもの、思ったことを私たちに伝えてくださいました。僕は、その話に聞き入り、被爆者の心の声をしっかりと受け止め、心の中に刻み込みました。

2日目は、平和祈念式典に参列し、72年前のたった今、真夏の長崎市で起こったことを想像しながら黙とうをささげました。今年の長崎平和宣言に、「遠い原子雲の上からの視点ではなく、原子雲の下で何が起きたのか、原爆が人間の尊厳をどれほど残酷に踏みじったのか、あなたの目で見て、耳で聞いて、心で感じてください。もし自分の家族がそこにいたら、と考えてみてください。」という文があります。式典でこの言葉を聞いたそのとき、恐ろしくて、体が震えました。悲しいというか、辛いというか——。とにかく感情が溢れだしました。

2日目の午後に派遣の目玉のひとつでもある、長崎原爆資料館を訪れました。ここには長崎原爆に関する資料から核兵器の現実、そして核の未来まで様々な視点で資料が展示

されていました。また、市内見学では、長崎の町を見渡すことができるグラバー園に行き、爆心地からの距離や、山と海に囲まれていることなどの地理的な特徴が地図ではなく、実際に見てわかりました。

今回の派遣で、被爆してかろうじて生き残った方々の被爆後の生活について、原爆資料館などを見学しているときに、「もし自分が被爆者であり、差別されていたら」「もし自分が差別されているところを見たら」など、原爆が投下されたあの一瞬だけではなく、投下されたあとも苦しみ続けていたと考えると、いてもたってもいられない気持ちになりました。また、1日目に行った被爆クヌノキには、爆風で飛ばされてきた小石が木の穴の中にたくさんあり、また、近くには爆風で飛ばされてきたと思われる大きな石もあり、文章や写真では決して伝わらない原爆の威力が自分の五感を通して伝わってきました。僕は、この貴重としかいいようのない経験を将来に活かすために、今回参加した青少年長崎平和使節派遣の経験を胸に、自分なりに平和に関する知識を蓄えていきたいと思います。そして、平和に関わる仕事に就き、核なき未来に向けて貢献したいと思います。

4. 派遣をふり返って（感想）



酒井 日向

とても貴重な体験をさせて下さり有難うございました。被爆建造物を見たり、被爆された方の話を聞き、二度と戦争が起こらないように未来の人に伝えていこうという気持ちがよく伝わってきました。

被爆体験者の生の話を聞いた世代として、この先も平和を保ち続ける努力をしなくてはいけないと思いました。

私が特に印象に残ったのは、被爆者講話です。やはり被爆者の話し方やその場でしか味わえない緊張感が印象に残っています。

あいにくの雨でしたが平和祈念式典に参加できたことを光栄に思います。これからは自分の中の小さな世界を広げていき、その小さな世界で原爆のおそろしさを伝えていこうと思います。



中島 心暖

最初、派遣に行く時は、周りの人達と仲良くなれるか不安でした。しかし、一緒に行動する機会が多く、自然と話せる機会があったので少しずつ打ち解けていき、最終的には仲良くなれたのではないかなと思います。とても楽しく勉強になった派遣でした。



砂川 柊太



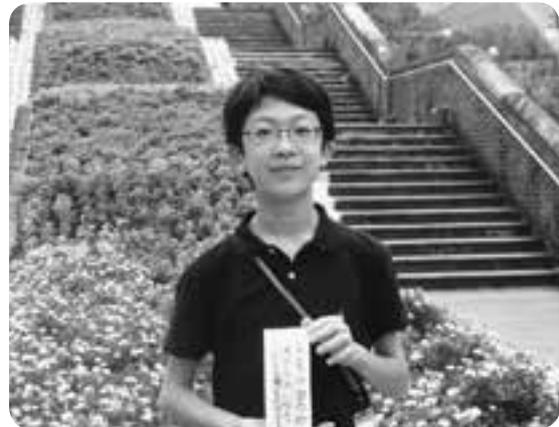
稲葉 さくら

この三日間で、たくさんのことを学ぶことができました。普段聞くことができない被爆者の方のお話、その場所でしか見ることができない被爆建造物、また、「平和」を中心とした学習など滅多にない体験ができ、とても良い経験になりました。

学んだことは今後にかわしていき、平和の尊さ、戦争の恐ろしさを誰もが忘れないよう、次の世代へと伝えたいと思います。

被爆して生き残った人の被爆後の生活について、資料を見ているときに、もし自分だったら、もし自分がそこにいたのならば、と考えながら見ました。

そのようにしながら、たくさん資料と被爆したクスノキなどを五感で触れることで「ナガサキ」がより身近なものになりました。



小山 竜輝

